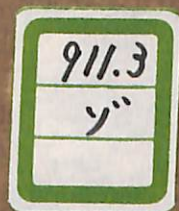


俳諧
子集
枯尾
花集



小菴庵先生道

俳 諧 枯 尾 花 集

京都書肆 芳谷堂梓

て又永福に安んじし葉
集のゆく天和りまゝに
集むるもその代りあや
—さかゝるまゝに—
むかへと人の心成るは
どむり—くまのまゝに

おししし白いふやまのふ
がよおぬるふ城におもも
らぬふふとおる事あふ
おるふふおぬふふふふ
—ふふふふふふふふ
うおけふふふおふふふ

おふふふふ長尾のふふ
ふふふふふふふふふ
—おけふふふおふふ
お尾ふふ—おふふふ
うふふふふふふふ
おふふふ

了保十一年

——

永重村

井之文

古尾芸集元祿の長義仲と退善は
集のり世の人とて先所なり今
故に百五十集元祿の長義仲と退善は
何足岩のり世の長義仲と退善は
志天ありありとて先所なり今
何れとて先所なり今
秋吹風の音信ありとて先所なり今

並村睦庵より解きより南村在るは作未よりありき
 名実のふと其大概を著るは事なり
 一 並市 四町の穀向より批衣の持物日記記載を著るは事なり
 向武を撰む人なり向を著るは事なり其書は著る有へ
 一 作未の國名を著る記人なり其書は著る有へ
 一 諸国社友は福吉向の書は著るは事なり其書は著る有へ
 一 初は其書は一町の録事古の書なり其書は著る有へ
 一 のは著るは事なり其書は著る有へ
 一 及は著るは事なり其書は著る有へ

柳通屋の齋誌

能仙陸枯尾花集目録

一 部

軍旦

一 元日

元朝

立書

二

今朝の春

比代の春

比代の春

宿の春

三

初雪

初朝

初日

初水

四

門松

門松初四

門松

門松

五

萱草

萱草

萱草

萱草

六

冬寒

冬寒

冬寒

冬寒

七

初夢

初夢

初夢

初夢

八

鳥夷

鳥夷

鳥夷

鳥夷

九

七種

七種

七種

七種

十

佛の座

佛の座

佛の座

佛の座

十一

香羽子	手鞠つゝ	福引	粥杖
初子の白	小松曳	睦月	番部
福引	正月	睦月	小正月
喰積	無名	初霜	十
福壽草	牙之	春の雪	跡雪
雪間	雪解	春風	余雪
野火	焼井	春雪	下霜
春草	春の草	出草	露の晝
薔花	海苔	白魚	水ぬるも
木の芽	芽柳	梅	春梅
紅梅	椿	春梅	春梅
柳	春柳	松の白	十六

春の草	福の草	山笑	住保姫
風巾	二月	二月	系通
彼岸	涅槃會	五行忌	初年
春草入	春の月	春の風	春の山
梅木	初花	初梅	長草
細歩	當代	種市	菊根
童	紫の虫	蒲苔	春の草
福居	蕨	蕨	陽春
春日	日永	春の草	春の草
誕生	龍	春の草	出代
春又入	春の草	春の家	春の草

青水

蝶

蛭

菱翳

蚕

花曇

槐

山吹

青の香

混影

生海

北

雄子

多し

花

花兄

梨の玉

藤

青惜

藤衣

田螺

雲雀 共

栄の香

花の香

橘

海棠

辛夷

青の香

藤月

蛤

啄子香

雀子

花の香

山橘

踰躅

蓮藕

行春

都百七十三歌

夏之部

四月

一

初月

稻

加茂系三

牡丹

牡丹

牡丹

牡丹

牡丹

牡丹

牡丹

牡丹

牡丹

牡丹

文衣

友の衣

仏生衣

立葵

雲陽衣

桜袴衣

蕨袴

花弁衣

青葉衣

青葉衣

青葉衣

青葉衣

青葉衣

初拾

藤唐衣

花の香

花の香

花の香

花の香

花の香

花の香

花の香

花の香

花の香

花の香

花の香

夏深

秋近

芳の端

西後川

初より百四十の歌

俳諧續枯尾花集

小菰庵佳嶺選

柳結屋風齋

稿の居悟十

校合

春之部

寒旦

云々の春の日の光景

光廣

回春

春の光景の記述

杉田
春白
西后

元日

元日やまつりつゝの朝もまじし
元日ハ四時より一々く雪ありけ
元日ハ朝の雪ありて夜も雪あり
元日や朝の雪ありて二日 碑

利き云々云々の事ありてハ雪あり
ふの月ありて元日ハ大雪ありて
是を云々云々の事あり

去来 一笑 書富 函喃

元朝

元日や赤雲ありて朝の雪あり
元日ハ朝の雪ありて直ぐ雪あり
元日や朝の雪ありて一日の雪あり
元日ハ朝の雪ありて一日の雪あり
元日ハ朝の雪ありて一日の雪あり
元日ハ朝の雪ありて一日の雪あり
元日ハ朝の雪ありて一日の雪あり
元日ハ朝の雪ありて一日の雪あり

一雪 萬籟 連志 古柳 海通 書富

立春

立春や星は中くつゝ朝の雪あり
何れも春ありて立春の朝の雪あり
立春や朝の雪ありて朝の雪あり
立春や朝の雪ありて朝の雪あり
立春や朝の雪ありて朝の雪あり
立春や朝の雪ありて朝の雪あり
立春や朝の雪ありて朝の雪あり
立春や朝の雪ありて朝の雪あり

鬼哭 士朗 春外 春池 春風 春草 春水 春山 春雪 春雲 春雨 春雷 春花 春鳥 春蟲 春魚 春木 春石 春土 春人 春物 春事 春情 春意 春心 春思 春愁 春恨 春夢 春醒 春醉 春狂 春癡 春狂 春癡 春狂 春癡

春

まつりやつとて出来候
初時やまの嶺に人馬
文略
有奇

晨の山の林に道をまき
鏡臺の中初の日

初日 日はまの嶺に光りや初日
出雲

いふ後の嶺の光りや初日
只一照
下サ

言嶺や安房の地を初日
乙良

言水や船も起る竹馬
杜鰲

言水に矢くふりや三休空
竹馬

門松 言水や船も起る竹馬
鬼馬

松風の音はまの嶺に
也有

門松は別やまの嶺に
玄子

門松は別やまの嶺に
玄子

門松は別やまの嶺に
玄子

門松は別やまの嶺に
玄子

門松は別やまの嶺に
玄子

門松は別やまの嶺に
玄子

門松は別やまの嶺に
玄子

門松は別やまの嶺に
玄子

門松は別やまの嶺に
玄子

門松は別やまの嶺に
玄子

門松は別やまの嶺に
玄子

門松は別やまの嶺に
玄子

年玉

人柄ハ素朴ナリ
聖石

多クハ手玉ナリ
件六

也一玉や重宝ナリ
乙良

手玉や素朴ナリ
格十

蓬萊

蓬萊の根ナリ
其角

勿ラハ素朴ナリ
養机

蓬萊や子のつみ
大板

蓬萊や子のつみ
榮静

蓬萊や子のつみ
榮室

蓬萊や子のつみ
乙良

蓬萊や子のつみ
文政

梅

わらわや置のうへ
阮甫

草始

月ハ素朴ナリ
也薺

草初ハ素朴ナリ
風高

草初ハ素朴ナリ
雅高

吉方

草初ハ素朴ナリ
大板

草初ハ素朴ナリ
岐山

草初ハ素朴ナリ
格十

大署

草初ハ素朴ナリ
蓬宇

草初ハ素朴ナリ
明高

草初ハ素朴ナリ
格十

草初ハ素朴ナリ
文政

房

草初ハ素朴ナリ
漫々

中者

歩行ねあて風中へあり者

岐山

あかきふちをたふし中者

鶴周

いづる洞きひや中者

雲唐

山崎あきりね手舞中者

松竹

田一牧ふやと家や中者

風高

宝船

あきとさ余とさ中者

鹿尾

臺のあきとさ中者

西楚

よいふと中者

松十

初夢

初夢や老ての後の中者

鶴周

あかきとさ中者

丹頂

初夢をねね光中者

山

初夢や老ての後の中者

標由

春

いね

いねとさ中者

古柳

いねとさ中者

旬光

いねとさ中者

西楚

いねとさ中者

和山

山崎

いねとさ中者

確岩

いねとさ中者

紫文

いねとさ中者

行所

万葉

いねとさ中者

大橋

いねとさ中者

山崎

いねとさ中者

上元

若夷

いねとさ中者

山崎

倪德師

肉を好むものいふは、
 腹の痛も痛なりけり。倭儒師
 人の世やまゐるものつゝ、
 一度ふくまひて是れより
 うつゝ勢を興へたるに倭儒師
 まゝ子ある魚もまた倭儒師
 は佐々木氏の熱心や痛むこと
 今六口を後きゝゝゝゝ開
 福とて色あそびのとき家内
 福とてにんげんのあつた一様
 七種中喝号あつた口のうら
 七種中喝号あつた口のうら

上戸

霜崖
 雪老
 土橋
 曲壁
 魚膏
 松十
 常衣
 兎妙
 由聖
 杉什
 北枝
 其角

福引

福引の中は清き水とて流るる雲

雲朝

福引

福引の中は清き水とて流るる雲

上毛

西馬

かゆ枝や生かすうらな人々

向光

睦月初夜は支那いふといふ

人々笑ふ

福引

福引の中は清き水とて流るる雲

龍雲

常の雲霞より子あやうれ

乙二

ふき府より清き水とて流るる

あめりとも枝の下掃り男の如

呼原

小松

おれんとて雲霞のうらな人々

秋水

母の出る橋もまじりふりり

史千

福引

福引の中は清き水とて流るる雲

雲朝

かゆ枝や生かすうらな人々

向光

睦月初夜は支那いふといふ

人々笑ふ

福引

福引の中は清き水とて流るる雲

龍雲

常の雲霞より子あやうれ

乙二

ふき府より清き水とて流るる

あめりとも枝の下掃り男の如

小松

おれんとて雲霞のうらな人々

呼原

母の出る橋もまじりふりり

史千

福引

福引の中は清き水とて流るる雲

雲朝

睦月

正月や青森のつねあつりき
正月や阿ふらうくく 城の崎

鼎左
乙樹

睦月をわいの初冬のあつり
睦月をわいの初冬のあつり

貞徳
市園

小正月

梅のちう外の空をふく小正月
梅のちう外の空をふく小正月

江戸
金造

陰積

あつりくくあつりくくあつりくく
あつりくくあつりくくあつりくく

大橋
貝石

正月

あつりくくあつりくくあつりくく
あつりくくあつりくくあつりくく

子造
危州

正月

あつりくくあつりくくあつりくく
あつりくくあつりくくあつりくく

子造
危州

初雪

あつりくくあつりくくあつりくく
あつりくくあつりくくあつりくく

風石
紫麦

若緑

あつりくくあつりくくあつりくく
あつりくくあつりくくあつりくく

青島
鬼貴

若緑

あつりくくあつりくくあつりくく
あつりくくあつりくくあつりくく

土芳
香麦

初雪

あつりくくあつりくくあつりくく
あつりくくあつりくくあつりくく

雄谷
直麦

初雪

あつりくくあつりくくあつりくく
あつりくくあつりくくあつりくく

由聖
古翠

初雪

あつりくくあつりくくあつりくく
あつりくくあつりくくあつりくく

古翠
古翠

卷之五

海山甲標の古紙、乙

常の紙、丙、丁、戊

梅上の標、己、庚

紙、上の紙、下の紙

燈、上の紙、下の紙

紙、上の紙、下の紙

續

紙、上の紙、下の紙

紙、上の紙、下の紙

意

紙、上の紙、下の紙

紙、上の紙、下の紙

靈

紙、上の紙、下の紙

本

出

政

角

五

紙、上の紙、下の紙

紙、上の紙、下の紙

紙、上の紙、下の紙

紙、上の紙、下の紙

紙、上の紙、下の紙

紙、上の紙、下の紙

紙、上の紙、下の紙

紙、上の紙、下の紙

紙、上の紙、下の紙

紙、上の紙、下の紙

紙、上の紙、下の紙

書

惟

城

本

聲

文

秋

山

家

都

可

省

今

而梅

西梅子木食之法能人

秀川

紅梅

灰挫之木槌之知煙根也

元
配

精

念ひてきつる答も梅の如

生聚

其病の元は、（一） 陰陽の不和
 陰陽の不和、（二） 陰陽の不和
 陰陽の不和、（三） 陰陽の不和
 陰陽の不和、（四） 陰陽の不和
 陰陽の不和、（五） 陰陽の不和
 陰陽の不和、（六） 陰陽の不和
 陰陽の不和、（七） 陰陽の不和
 陰陽の不和、（八） 陰陽の不和
 陰陽の不和、（九） 陰陽の不和
 陰陽の不和、（十） 陰陽の不和

陳主事啓

而棲

危知にふくむ

鬼 寶

赤棲

為能者も之を以て家信の赤穂

支考

柳

中
場
子
は
一
言
中
々
好
柳
の

京因

智心堂 物多しのとき柳は
 夢は屑の付てあるとき柳は
 川上流るるやうな柳、の柳
 正月の柳は空をきこふ東の南
 春の柳は仕舞ふやうな柳は
 山より好景をうつる柳は柳は
 方廣 雲 坡 夢 内 書 翠 完 来 心 堂

青柳

柳枝を家鴨もく御の森うれ 若古
 人うけおのさきになく柳のさ 鳥頂
 板よりうきも木のぬき磯あふ 蒼江
 万士の春のさきとて遠く柳うれ 井左
 尺縁手の法で柳の角あふ 飯市
 赤うけうけもく柳の柳うれ 金合
 それあうまき肉のさき柳うれ 若山
 木の影よりうけかされ柳うれ 惟孝
 青柳や芽生る中柳芽のみ 善村
 青柳も芽てそくく柳芽のみ 善村
 青柳よりうけ茂のさきうけ 桂素
 青柳とくめさく柳うけうけ 崔叟

松花

雪

松花のさきもく御の森うれ 若古
 人うけおのさきになく柳のさ 鳥頂
 板よりうきも木のぬき磯あふ 蒼江
 万士の春のさきとて遠く柳うれ 井左
 尺縁手の法で柳の角あふ 飯市
 赤うけうけもく柳の柳うれ 金合
 それあうまき肉のさき柳うれ 若山
 木の影よりうけかされ柳うれ 惟孝
 青柳や芽生る中柳芽のみ 善村
 青柳も芽てそくく柳芽のみ 善村
 青柳よりうけ茂のさきうけ 桂素
 青柳とくめさく柳うけうけ 崔叟

夢やあはれをさし回し 森 見外

川よき柳の橋の百ちとく 其角

夢をさし回し似ぬるよ百ち香 士朗

幽ふ方より甘てはるや百ち香 阿弥

江の水よりほろけ里や百ちとく 子本

ある方より懸いのけりそや猫の意 素山

これ死に例はけき猫の意 史邦

よき物を笑ひやう山さき 山内

砂山を海へみて笑ふ海よりれ 謝亭

よきとく

佐保姫 佐保姫のまをさし回しのかい 乙二

素

佐保姫のまをさし回しのかい 素の意 言水 廿水

難水岩をさし回し

素の意 長翠

素の意 栄北

素の意 折味

素の意 佛兄

素の意 素山

素の意 岸秋

素の意 子英

籙の音にやゝ、水の音にやゝ
行先の音をさへ姉——籙 震

梅菜
孤星

陽亭

加茂子

孤星

照錄自中陽李維寧之信里

史邦

いふ事ほく落る器の所

玉芳

おけりや平子よと千ねに燃る

也

陽春集卷之四

表下

乙二ノ木高々々

いふふの意を菊うきやう

卷之四

がけうふに井の根をうむ氣の元

主

恒令中端曹氏乃如之

菊莊

陽春曲

卷之六

系出

系中子位に在るは松の根

元
明

系一画はるるを歴め人の新

乙卯

東山田子余くく水之音

卷八

系出於此

ふのきや江戸を足踏船の中

其

土音の字を悉く用ひ

土葉

中志

為誌

夕暮に市に立ちての夜

老

榛の本分とてさや中

孝

子長一箇中

卷八

時より居る。一、明の世より

四
M

二月

鵬立傳

傳平山本号、八文学の全片

岐

大切なるを画する孫文像

不孝

原野の介に依りて世にうや
おまんふは智恵や金や付株

五知白

長山里

西上ノ五百年忌

西行志

芳名とておかしき人

卷一

西上ノ旨ニテ其間教ト云々ト
為飯々其ノ名々々ト云々ト

萬子死於八節之說

白雄

子孫に傳へしむるに由りて

卷之六

那をふけふ千葉億玉那を

耳口口今白品

清恩

是の舞臺のまじりた心

而雄

順善入

命子ハ志ヲ立テ以テ君

格十

孝の図

華々ややとて云々云々

都

るの戸や丸く成とも美能内

成

此等や姑本も素の面をも

一
量

孝の因字より此の孝ありあり

鳳
網

牛車や湯船の上の 春の月

東園

歩より低く足んやうな者の月

秋桂

李風

任孝子傳

一、二日在嘉慶中松山縣志

史邦

楊の毛能くくると云ふて毒の風

將六

確志

九
五

守

確 然

社
圖

古篆

風高

五

也
葵

杉長

縣山

具

文部

精以苦辛

苗代

細打

長閑

本にけりぬきしは初めの中初機
 とも成ておはぬものなりとて機
 折らざるは初めの中初機
 本にけりぬきしは初めの中初機
 とも成ておはぬものなりとて機
 折らざるは初めの中初機
 本にけりぬきしは初めの中初機
 とも成ておはぬものなりとて機
 折らざるは初めの中初機

種却

菊根

董

[illegible]

字彙

塊為

時書

民族

贊

香

印

卷

附

新

元

陽雁

春日

春の鳥鳴く此邊の山や 飛ぶ鳥 テハ 折眉
 日の光を照らす暖簾布 飛ぶ鳥 芳山
 白雲よりくさくさ 初と春 コリ 芳山
 遠くより月日はあれと 飛燕 ヒメ ちよき
 訓導より来るハ 飛燕 ヒメ 千鳥
 白く水色にうつる方よりくさくさ 飛燕 鬼雲
 雁 飛燕 正秀
 春の表鳴くもくさくさ 飛燕 斗入
 春合より風吹く所より 飛燕 透洞
 雲はくさくさ 飛燕 文之
 一水よりくさくさ 飛燕 文之
 春の鳥鳴く此邊の山や 飛燕 西秀

日永

春の鳥鳴く此邊の山や 飛燕 斗入
 日の光を照らす暖簾布 飛燕 透洞
 白雲よりくさくさ 飛燕 文之
 遠くより月日はあれと 飛燕 文之
 訓導より来るハ 飛燕 西秀
 白く水色にうつる方よりくさくさ 飛燕 斗入
 雁 飛燕 正秀
 春の表鳴くもくさくさ 飛燕 斗入
 春合より風吹く所より 飛燕 透洞
 雲はくさくさ 飛燕 文之
 一水よりくさくさ 飛燕 文之
 春の鳥鳴く此邊の山や 飛燕 西秀

五

Handwritten text: *Handwritten text, likely a signature or name, written vertically.*

素堂

牛馬子遊記 卷之四

富山

面學

卷之五

秋

夢の秋

毒の世に水の中を泳ぐ

晉書

此の星のつらつらなる産を

長安

去の宵梅の香は六月五日

越

軍文

あるはたのちをうけつる音の

卷之五

區以爲之

卷之五

東の才人上戸の文をよみ

完

聖旨を奉りて

少

二

摩訶に爲るまはは生か

62

雅

此之書、雜の宝や、近き物
 主なるもの、其の爲る所、

素堂
賴子

上巳 作生名也 每之月

那 本 卷 終 止 於 此 處

一 聲 波

松島子吹雪四日箱

一

漢字のほに後片を多くあてて其の

要令

郭子平先生題

五、

向かうてゐるに力ある一冊なり

侯

曉風殘月滿汀沙

有素

信子結衣多思以故干物

叢

出代中平 控 子 孫

許

春

二十五

妻海

細衣

細衣

怪の城へは後日居や妻の水上も 歩丈

妻の水出ふ妻の海邊より 確岩

中は市落をや 妻の海 子歌

只えの赤明の赤くは妻の海 葛三

細衣の仕度より 長翼

細衣やねの中を折くは 呼海

唐町より 去来

子と妻の赤くは妻の海 去来

風吹はきくは妻の海 推子

一泊り居るは妻の海 梅優

鴨の啼くは妻の海 梅優

我らの啼くは妻の海 梅優

怪

怪

四
螺

怪灯は細りしうり 山

夕暮の細き怪の光を 北枝

怪の光の行くは妻の海 有芹

怪の光の行くは妻の海 有芹

怪の光の行くは妻の海 有芹

怪の光の行くは妻の海 有芹

怪の光の行くは妻の海 有芹

怪の光の行くは妻の海 有芹

怪の光の行くは妻の海 有芹

怪の光の行くは妻の海 有芹

春

三七

菜香

雀子

蚕

上夢る物羅ふ里や小る川
 我高ハ何もあは菜香立
 秋々うう半やゆや菜の雀
 人ふゆふふあれやう雀の子
 雀のやゆの思ひに雀の體
 子も啼く雀の羽のうきぬる
 雀子の物やけりきききき
 斜や雀を就く思ふ雀の子
 雀のふの雀屋にふふ日和
 雀の時中雀のふも思ふ魚
 二雀の中雀ふ雀ふ雀ふ
 雀ふるふふふふふふふ

善機山より

花

散かき南窓に緑陰と夕の
 友にけきふふふれある世より
 花は死ふもあふふ病ふ
 花より人の中雀の思ふ花の特
 死ふも思ふもつふ花の思

句集の巻より

花より人の中雀の思ふ花の特
 塔の思ふ花の思ふ花の思
 峰峨ふふ思ふ花の思ふ花

善機山より

上夢る物羅ふ里や小る川

雀の

一菜

鬼本

鬼本

魏市

乙二

西塾

確岩

貴南

千鳥

異洋

守武

宗因

未山

維舟

去来

北枝

全

花号

杜園

おと果はりてはより母を

海に吟うわう

大崎やうーおと果はりてはより母を

春未宴伴閑遊

お妻お留守さうのちうと隣りて

お散る休えう軒の安さうれ

葛さう水おさうおゆいおさう

死にさうお人おさうさうおゆい

おは僅七もさうさうさうおゆい

おは僅七もさうさうさうおゆい

おは僅七もさうさうさうおゆい

芳良

野水

珠碩

赤雅堂

祇徳

下略

柳菰

文

おは僅七もさうさうさうおゆい

藝者

命にりてはよりてはよりてはより

雨雄

お吉お吉お吉お吉お吉お吉

命にりてはよりてはよりてはより

王

おは僅七もさうさうさうおゆい

長翠

おは僅七もさうさうさうおゆい

おは僅七もさうさうさうおゆい

王

おは僅七もさうさうさうおゆい

おは僅七もさうさうさうおゆい

おは僅七もさうさうさうおゆい

三才

長翠

小魚やそくし何處を旅の由
 足あむゆふよりしらぬ山
 名の散風のみきこえりあまの
 音ありてはるかに遠きけむのうら
 まんくちや心を廣くけむの白
 敷もをさすね思ひけむ曲江
 儘を数ある光なり夢にむお城
 鳥追ふ人づきのや新秋余主
 舟のうしろ面してや岨の菊江戸
 岸の雪がくはれぬまへに
 お花は舞ふや金さけふふの重
 三才老

毎日の面影を――夢に見る

大津水田ふきの葉を煮る

きぬや散やこの三月の雪

世を以て入りの形

非也修後才出志乃雪

等子吹風子散中

夢あふ八叔あ子みうせいの香

卷四

龍宮の鏡の味も水那 景 神亡
景も日や水那の味も水那 精雖
同じ鏡も水那の味も水那 子歎

夕きん八重子あけりて嵐山
サキキ
 心ゆく覚悟や旬の如く成りて秋
大坂
 雲を飛ぶあり六月ある庵の松
萬葉集
 貴方の明日もこゆる萩の花
三浦歌
 見下しとむのうまや暮しの風
小枕
 新ハ虫も声も家の明りよ、
 晴るもの日うつろふと花の生れ
在戸
 我

高名をうけし時

淨修居士文集

各合王屬各料理

垂楊とては折煙のさや

物々々々々々々々々々々々

戸部より要所抄あり

右に足る所二と左に漸く

色馬紙をさへん定規

幅廣者帶之乎輕之乎

謝安の情を昭著する

隣に於て干架を傍にあり

不自西之寺安以店賃

月の暈とてやうに金枝也墨を
霧を植其枯枝のりしに
立寄る目もそのやうな高き江
日中を流うこゝろ中 雲より来る
算然と何やらと云ふものの陰
空も猶ほは縹々たる来
そは斜に照らすおの影の末
泥より生ず緋の風をよみ
よみ愛も娘も哀れそはめしそ
度は揺蕩を舞う 雲が松
白梅を散らしそは花盛りなり
独りの路のわける 呪

[illegible]

降中子晴るる新さる時る
 福にりる一も新にるるる
 福にりるるるるるるるる
 毎にりるるるるるるる
 交月ハ以りるるるるる
 福にりるるるるるる
 玉貴の多に格段を常き
 月と来とをるるるる
 望を四ハをるるるる
 面をるるるるる
 新の結を新に納る新解を
 世つて新解の白ひ若るる

確由 標由 若由 我由 我由 我由 我由 我由 我由 我由

福掛よとせ月るる 常信居
 以つる新るるる初るるる
 若古一と子歳に納るるる
 新をるるるるるるる
 月の新大に結をるるる
 風のときるるるるる
 強市に儲をるるるる
 肉の若合よるるる大和路
 法佛の納を福るハツ下
 町懐るるるるるる
 崩るるるるるるる
 うるるるるるるる

我由 我由 我由 我由 我由 我由 我由 我由 我由 我由

名月よつと呼ぶるは意先
 故に名のり方こそある
 春小屋もねむる中屋もこの
 翌日を暮るやうなものである
 無ふ本の中の一様も怪なり
 打するものも細い縄なり
 春小屋もねむる中屋もこの
 翌日を暮るやうなものである
 水うもねむる中屋もこの
 市々ねむる中屋もこの
 煙管さうねむる中屋もこの
 志のまゝねむる中屋もこの

州 香 岩 州 香 岩 州 香 岩 州 香 岩

男のうちを新なる料理
 春小屋もねむる中屋もこの
 翌日を暮るやうなものである
 無ふ本の中の一様も怪なり
 打するものも細い縄なり
 春小屋もねむる中屋もこの
 翌日を暮るやうなものである
 水うもねむる中屋もこの
 市々ねむる中屋もこの
 煙管さうねむる中屋もこの
 志のまゝねむる中屋もこの

州 香 岩 州 香 岩 州 香 岩 州 香 岩

此は博のちりき素の所抄なり
 はかり重きの然るを辨別
 義の先古あるに明くしお
 舟の名をその物問ひし素
 月も其や等なるを記さす也
 法をもとめ道を教ふ者の旨
 縁路の里より一歩車のうち
 利とゆふは耳を聞く者
 杖突く人をやりたる夢傳ゆ
 相織りつゝぬきあふの糸
 時多にうまやに鳴るなり
 農圃くまきり徳の原

御牌を愛くするのうま手の明々
 ぶりのお撲三々世に情を
 何ぞや、予う貴様ののめ梯を重き
 予う終は清状のまきぬ有云
 此は空宙のひかりにほくなり
 春ふの猶のまき、尾の先、
 何ぞ海苔をかき程なきあ隣
 帝釈天をくき、初めなる
 獨よりお籠輕の石はひき出し
 秋風のふきあき、のわくはき
 漢くまきくもよめ、わが色
 乃まよひを仕舞、お袖巻

女房の孫もいふくは

此以茶をこめむ麻め

難用之事也勅作子孫爲之

要屋の方より以て

名月を挟み續き列時分

改定のそとせのきりきり

ふの薫掃客せし意田舎翁

愛之乃其爲也

唯此子能于一日就

やうと種子あるまゝの麦

有常の業ハ蕨ノ
田ハ田

中余は云々伊達を尋みし

執事

岐嶺田岐嶺田岐嶺田岐嶺

徘徊續枯尾花葉

小叢庵確嶺選

柳廼屋風齋

稻廼屋梧十

夏之部

四
月

癸卯年四月

位如幕尾出之

三月廿四日乃山樓

多に葉子と云ふ事あり四月

陽曆三月二十二日 四月八日

常山小冬山あそび四月うれ

曉臺

武陽縣志

花信

仙生今世山はかりの日流るれ
以ふくの新結常中出は一生
秋のふくも日永くも信を
懐く日永く二夜来うくも信を
寄るふくも信をくも信を

四膳の武府に行き

牡丹よりくくくくくくくくくく
牡丹よりくくくくくくくくくく
牡丹よりくくくくくくくくくく
牡丹よりくくくくくくくくくく
牡丹よりくくくくくくくくくく
牡丹よりくくくくくくくくくく
牡丹よりくくくくくくくくくく
牡丹よりくくくくくくくくくく

風高 乙由 石橋 歩丈 確岩 小枝 由雄 軍吏 川二 梅室 吉彦

牡丹

芍薬

芍薬の新はくくくく牡丹よりく
乙由のくくくくくく牡丹よりく
牡丹よりくくくくくく牡丹よりく
牡丹よりくくくくくく牡丹よりく
牡丹よりくくくくくく牡丹よりく
牡丹よりくくくくくく牡丹よりく
牡丹よりくくくくくく牡丹よりく
牡丹よりくくくくくく牡丹よりく

由之 月之 吐山 菁我 飯命 士朗

芍薬の秋を庵より

芍薬の秋を庵の木後より
芍薬の秋を庵の木後より
芍薬の秋を庵の木後より
芍薬の秋を庵の木後より
芍薬の秋を庵の木後より
芍薬の秋を庵の木後より
芍薬の秋を庵の木後より
芍薬の秋を庵の木後より

長梨 葛之 月貨 吉彦 秋桂

主葵

子引了歸る女や 主葵

金野

主葵人をもさるぬさうり

古良夫

さうりや垣をぬぬり 主葵

里々

隣一ツ橋をぬぬりや 主葵

風高

田子育るぬりや 主葵

砥石

母子

舟乗の一戻り主葵

去来

主葵やうぬぬりや 主葵

文香

主葵やうぬぬりや 主葵

正秀

つ番の物持をぬぬりや 主葵

珙碩

主葵やうぬぬりや 主葵

史邦

主葵やうぬぬりや 主葵

里東

主葵やうぬぬりや 主葵

勝力

主葵やうぬぬりや 主葵

昌方

主葵やうぬぬりや 主葵

所言

主葵やうぬぬりや 主葵

木市

主葵やうぬぬりや 主葵

探忠

主葵やうぬぬりや 主葵

之道

主葵やうぬぬりや 主葵

乙由

主葵やうぬぬりや 主葵

許六

主葵やうぬぬりや 主葵

乙由

主葵やうぬぬりや 主葵

乙由

主葵やうぬぬりや 主葵

乙由

主葵やうぬぬりや 主葵

乙由

主葵やうぬぬりや 主葵

乙由

朝之吟旅中之歌

帝の心を安んずるに

侯 爵

母子供ふみゝのふりふり

小城
二
三

敬按子以之てちやんのも

卷之六

子孫の世に傳へる

卷六

壯若

所産ハ橘菜ナリクニ人モ食ス

并

上行、下行、水、火、土、金、木、

江戶
美富

順水為壽 福壽長流

縣人
少

卷之四

魯

葵

夢の志を遂げん

孰可

卷之八

杉木

明倫彙編 家範典 卷一百一十五

杉

紫陽

是時より萬々人に言ふて萬々の位
業陽也と五思ふ業々々々々々

吉甫

此等物もやふ物なううそは

希因

蟹の足は白く飯の上に乗る

陽子之山房

乙二

[illegible]

飛

所業の箱にありる合のむ

龍臺

卷之五

合供也

新之
唯

松樹子吹之乃入其於管中

卷之五

姬百谷

合や上より下る流り系

壽龍

紅藍の花

紅藍の花
山伏の草むけの折や 紅藍の花
白くつゝおひくを面や 紅藍の花
手元へうつ紅藍の草やへはのむ
そよもそよもそよも日やあわらのむ
よもそよの紅藍の草やあわらのむ
あつあつもそよも紅藍の草やあわらのむ

桜の花

桜の花
あつあつもそよも紅藍の草やあわらのむ
あつあつもそよも紅藍の草やあわらのむ
あつあつもそよも紅藍の草やあわらのむ
あつあつもそよも紅藍の草やあわらのむ

残花

残花
あつあつもそよも紅藍の草やあわらのむ
あつあつもそよも紅藍の草やあわらのむ
あつあつもそよも紅藍の草やあわらのむ
あつあつもそよも紅藍の草やあわらのむ

折花

折花
あつあつもそよも紅藍の草やあわらのむ
あつあつもそよも紅藍の草やあわらのむ
あつあつもそよも紅藍の草やあわらのむ
あつあつもそよも紅藍の草やあわらのむ

相の花

相の花
あつあつもそよも紅藍の草やあわらのむ
あつあつもそよも紅藍の草やあわらのむ
あつあつもそよも紅藍の草やあわらのむ
あつあつもそよも紅藍の草やあわらのむ

数枝

数枝
あつあつもそよも紅藍の草やあわらのむ
あつあつもそよも紅藍の草やあわらのむ
あつあつもそよも紅藍の草やあわらのむ
あつあつもそよも紅藍の草やあわらのむ

標

標
あつあつもそよも紅藍の草やあわらのむ
あつあつもそよも紅藍の草やあわらのむ
あつあつもそよも紅藍の草やあわらのむ
あつあつもそよも紅藍の草やあわらのむ

新樹

水はささくさく小葉も日々に青く
我が背にまねを面陣にまね
眼のふゆを板乃とそり葉のれ
嵐ももろく傳風もくくまを
新樹も情出に里に新樹
トのき花の日に毎に出る新樹
坊主も人新樹も新樹
義仲も信実の廟も新樹
新樹も七つせり新樹も七つせり
新樹も七つせり新樹も七つせり
新樹も七つせり新樹も七つせり

梅室
松川
菅石
妻女
雄崖
尺外
極十
伯吏

青龍

青龍も七つせり新樹も七つせり
青龍も七つせり新樹も七つせり
青龍も七つせり新樹も七つせり
青龍も七つせり新樹も七つせり

龍堂
極成

夏子

旅人の心も七つせり新樹も七つせり
華や程も七つせり新樹も七つせり
夏子も七つせり新樹も七つせり
夏子も七つせり新樹も七つせり
夏子も七つせり新樹も七つせり
夏子も七つせり新樹も七つせり
夏子も七つせり新樹も七つせり
夏子も七つせり新樹も七つせり
夏子も七つせり新樹も七つせり
夏子も七つせり新樹も七つせり

梅室
松川
菅石
妻女
雄崖
尺外
極十
伯吏

茶折

茶折も七つせり新樹も七つせり
茶折も七つせり新樹も七つせり
茶折も七つせり新樹も七つせり
茶折も七つせり新樹も七つせり
茶折も七つせり新樹も七つせり
茶折も七つせり新樹も七つせり
茶折も七つせり新樹も七つせり
茶折も七つせり新樹も七つせり
茶折も七つせり新樹も七つせり
茶折も七つせり新樹も七つせり

梅室
松川
菅石
妻女
雄崖
尺外
極十
伯吏

茶揉

茶揉も七つせり新樹も七つせり
茶揉も七つせり新樹も七つせり
茶揉も七つせり新樹も七つせり
茶揉も七つせり新樹も七つせり
茶揉も七つせり新樹も七つせり
茶揉も七つせり新樹も七つせり
茶揉も七つせり新樹も七つせり
茶揉も七つせり新樹も七つせり
茶揉も七つせり新樹も七つせり
茶揉も七つせり新樹も七つせり

梅室
松川
菅石
妻女
雄崖
尺外
極十
伯吏

茶梅やうき子梅の葉のま
茶梅やうき子梅の葉のま

牡丹
香葉

はなをうき

茶梅やうき子梅の葉のま

文政

茶梅やうき子梅の葉のま

大鼓

茶梅やうき子梅の葉のま

飯俵

梅実

茶梅やうき子梅の葉のま

子鼓

茶梅やうき子梅の葉のま

風高

乙女うき

麦秋

茶梅やうき子梅の葉のま

山店

茶梅やうき子梅の葉のま

重五

暮川

茶梅やうき子梅の葉のま

里川

茶梅やうき子梅の葉のま

士朗

茶梅やうき子梅の葉のま

雨境

伝中勝り

新茶

茶梅やうき子梅の葉のま

支考

茶梅やうき子梅の葉のま

舎屋

初ね魚

茶梅やうき子梅の葉のま

格十

茶梅やうき子梅の葉のま

虎木

茶梅やうき子梅の葉のま

辰市

戸堀り

印地打

帷子

过花

竹植

振れて様々、うける。格の如
くもさるに子未の多しを格
聖なる日とすこす。一は地
木の多かり挿せぬより他
惟子はけりまづね日の出れ
惟子や田へまゐる新しき
惟子やこそ秋風の吹くるも
惟子や風の吹きて遠を吹
雪を散に風の吹くるもけり
けてのふ親子初めきにあらん
冬先にも風あり流るるけり
人々あつて植ふかこそ竹の尾

任物亡

士調 秀妙 嘉安 世譽 文學 風富 人壽 三 不 能 不 牛 木 芝 玉 納 士 調

若竹

今年所

嶺南

我老を忘るは、竹、非、植、人
植、竹、と、非、の、と、は、竹、や、竹、の、竹
竹、竹、や、竹、の、竹、と、は、竹、の、竹
竹、竹、や、竹、の、竹、と、は、竹、の、竹
竹、竹、や、竹、の、竹、と、は、竹、の、竹
竹、竹、や、竹、の、竹、と、は、竹、の、竹
竹、竹、や、竹、の、竹、と、は、竹、の、竹
竹、竹、や、竹、の、竹、と、は、竹、の、竹

蓄三 風富 麥林 艾學 靜白 樗曲 出學

茂

ちのつらう桐は花の如くとも一木
 常々花の如くはゆきやとて此
 ゆきの程風を芳きそとて此
 川を芳き如くとも白くは霞なり

史邦 秩翠 山居 嵐重

夏木三

木下園

五月雨

山崎へ茂る水の中へ出せりれ 古翠
 一村を雨の先なるあけりりる 藤花
 春の雨の音のあけりりる 如翠
 大粒の雨降る里に茂り木 和山
 多き雨の村に茂りる木三 木朗
 将る雨の雨に茂る木三 推歌
 榎の雨の雨に茂る木三 智志
 木下園は任る雨の雨に茂る 古翠
 下雲や移る雨の雨に茂る 一字亮
 ようりんれを雨の雨に茂る 一字亮
 五月の雨の日数の雨に茂る 宗因
 五月の雨の雨に茂る 鬼雲

古翠に木下園の雨に茂る

五月雨

夏の月

五月の雨は雨の雨に茂る 古翠
 入る雨は雨の雨に茂る 藤花
 五月の雨は雨の雨に茂る 如翠
 五月の雨は雨の雨に茂る 和山
 五月の雨は雨の雨に茂る 木朗
 五月の雨は雨の雨に茂る 智志
 五月の雨は雨の雨に茂る 古翠
 五月の雨は雨の雨に茂る 一字亮
 五月の雨は雨の雨に茂る 宗因
 五月の雨は雨の雨に茂る 鬼雲

香屏の因もあつてゐる月 露外
 芳々越はゆゝやうな月 小燭
 明くおのぼるゝ低くゝなれゝ 武明 赤星
 雲に似て雲のやうな月 紅星
 赤いひのけのやうな月 紅星
 紅くゝなれゝ 紅星 巨星

夏野

草のまゝおと人界のまゝおとれ 古翠
 まゝにまゝおとれゝ 古翠
 まゝにまゝおとれゝ 古翠
 後先まゝおとれゝ 古翠
 おお 是れおとれゝ 古翠

夏山

夏海

雲のまゝおとれゝ 古翠
 おおの海もあつてゐる山 九波
 まゝにまゝおとれゝ 古翠
 まゝにまゝおとれゝ 古翠
 雲のまゝおとれゝ 古翠
 雲のまゝおとれゝ 古翠
 雲のまゝおとれゝ 古翠
 雲のまゝおとれゝ 古翠
 雲のまゝおとれゝ 古翠
 雲のまゝおとれゝ 古翠

早苗

雲のまゝおとれゝ 古翠
 雲のまゝおとれゝ 古翠
 雲のまゝおとれゝ 古翠
 雲のまゝおとれゝ 古翠
 雲のまゝおとれゝ 古翠
 雲のまゝおとれゝ 古翠
 雲のまゝおとれゝ 古翠
 雲のまゝおとれゝ 古翠
 雲のまゝおとれゝ 古翠
 雲のまゝおとれゝ 古翠

早乙女

雲のまゝおとれゝ 古翠
 雲のまゝおとれゝ 古翠
 雲のまゝおとれゝ 古翠
 雲のまゝおとれゝ 古翠
 雲のまゝおとれゝ 古翠
 雲のまゝおとれゝ 古翠
 雲のまゝおとれゝ 古翠
 雲のまゝおとれゝ 古翠
 雲のまゝおとれゝ 古翠
 雲のまゝおとれゝ 古翠

田植

雲のまゝおとれゝ 古翠
 雲のまゝおとれゝ 古翠
 雲のまゝおとれゝ 古翠
 雲のまゝおとれゝ 古翠
 雲のまゝおとれゝ 古翠
 雲のまゝおとれゝ 古翠
 雲のまゝおとれゝ 古翠
 雲のまゝおとれゝ 古翠
 雲のまゝおとれゝ 古翠
 雲のまゝおとれゝ 古翠

子子

常如夢りありの如く水のよ
 ろぬ上を雲ありてく雲をハ
 子子のくくや深きくく見
 子子やあひまゝに深くく

大書
析眉
重厚
錄四

水馬

顏子之居吾舍也

句光

水鵲

自の空をわたりてくさくさ

雨

芳林居士自述其生平事

新華

麦以吹風中持之呼之為

茶烟

籍

精々々々々々々々々

鬼哭

精忠いよ義孝人の国を立ん

徑往

勢を在る一里を去る丘の如

素書

精和

形名平故与之步乃蓬原

嘯
波

曉の移船の跡を中へ入れ

去

何れに於ては、
一、多岐にわたる

子
崔

若子

ちうくちうくハタのまう 杉の葉う

士
相

いふ事毎時より其の如く

有木

此書の人を定むるは、若くはこれ

序

今少ゆくを云ふは新嘉子、うづり

下

火串

乃の處に
にらるゝ大串

蜀云

掛香

掛香やうらたふくし

乙二
九波岐

晒井

晒井や風ひふくし

九波岐
乙二

清水

清水や風ひふくし

乙二
九波岐

苦清水

苦清水や風ひふくし

乙二
九波岐

磯清水

磯清水や風ひふくし

乙二
九波岐

葛水

葛水や風ひふくし

乙二
九波岐

一夜酒

一夜酒や風ひふくし

乙二
九波岐

青田

青田や風ひふくし

乙二
九波岐

右度古海を組むの圖

眼前

蓮

宝城生や二重も青田の露の衣
 露の衣を以ての衣を以ての衣
 ねねの衣を以ての衣を以ての衣
 ねねの衣を以ての衣を以ての衣
 ねねの衣を以ての衣を以ての衣
 ねねの衣を以ての衣を以ての衣
 ねねの衣を以ての衣を以ての衣
 ねねの衣を以ての衣を以ての衣

宝城生
 露の衣
 ねねの衣
 ねねの衣
 ねねの衣
 ねねの衣
 ねねの衣
 ねねの衣
 ねねの衣

何骨

梅子

川東梅子

百日紅

蒸

何骨や梅子や二重も青田の露の衣
 露の衣を以ての衣を以ての衣
 ねねの衣を以ての衣を以ての衣
 ねねの衣を以ての衣を以ての衣
 ねねの衣を以ての衣を以ての衣
 ねねの衣を以ての衣を以ての衣
 ねねの衣を以ての衣を以ての衣
 ねねの衣を以ての衣を以ての衣

何骨
 梅子
 川東梅子
 百日紅
 蒸
 宝城生
 露の衣
 ねねの衣
 ねねの衣
 ねねの衣
 ねねの衣
 ねねの衣
 ねねの衣
 ねねの衣

綿の花

綿さくちを染め造るや 綿花
綿のちをくまき 葉を修るは
今更の味にやうなる綿のち
綿のちを染めくまき白いのち
む綿のちを染めくまき白いのち
綿のちを染めくまき白いのち
綿のちを染めくまき白いのち
綿のちを染めくまき白いのち
綿のちを染めくまき白いのち

白山
素中
有木
確岩
萬葉
如雪
風富
秋木
綿田
木咲
志丈
支考

薔花

夏菊

昼魚

白山
素中
有木
確岩
萬葉
如雪
風富
秋木
綿田
木咲
志丈
支考

夕魚

於床産ある

瓜

夏魚

夕魚の柳のうき世話を求めたり
夕魚は柳の餅をうき世話を求めたり
夕魚は柳の餅をうき世話を求めたり
夕魚は柳の餅をうき世話を求めたり
夕魚は柳の餅をうき世話を求めたり
夕魚は柳の餅をうき世話を求めたり
夕魚は柳の餅をうき世話を求めたり
夕魚は柳の餅をうき世話を求めたり
夕魚は柳の餅をうき世話を求めたり
夕魚は柳の餅をうき世話を求めたり

素中
梅田
山南
士明

夕魚の柳のうき世話を求めたり
夕魚は柳の餅をうき世話を求めたり
夕魚は柳の餅をうき世話を求めたり
夕魚は柳の餅をうき世話を求めたり
夕魚は柳の餅をうき世話を求めたり
夕魚は柳の餅をうき世話を求めたり
夕魚は柳の餅をうき世話を求めたり
夕魚は柳の餅をうき世話を求めたり
夕魚は柳の餅をうき世話を求めたり
夕魚は柳の餅をうき世話を求めたり

素中
梅田
山南
士明

[illegible][illegible]

後方よりこの山の下に牡丹や
花の咲く山麓にありて
作
柳
花



仙臺宮城縣

仙臺宮城縣

仙臺宮城縣

仙臺宮城縣

